

4 オーストラリアの米事情

岩 崎 正 典

1. はじめに

簡単に自己紹介させていただきます。伊藤忠商事の食糧部門では、今の中国大使の丹羽宇一郎さんが営業担当をされていた1980年代に、穀物相場をしっかりと把握、整理しなければいけない（担当者が交代するたびに統計資料や記録の散逸が甚だしく、業務にも支障をきたすとのことで）との考えのもとで、穀物相場の価格情報を中心にそれに関わる統計、資料、情報を収集、整理、分析する責任者を決めるようになりました。その責任者の3代目を私が担当しました。そのなかで、農水省の海外の農産物の需給動向の検討会にも参加し、トウモロコシと大豆の動きを担当する仕事を引き受け、数年間、服部先生とご一緒させていただきました。そういう関係で、今日、オーストラリアの米について話をする事になった次第です。

私は、シドニーオリンピックと前後して、4年間、シドニーに駐在しました。その前の80年代の大半の約10年間はアメリカに駐在し、オレゴン州のポートランド事務所で小麦やトウモロコシを買い付け、西海岸から積み出す仕事に従事していました。その後、日本へ帰りましたが、パプアニューギニアの現地人が運営する小さな事務所がポートモレスビーにあり、その監督の仕事を4年近くやりました。パプアニューギニアはオーストラリアのテリトリーなので、豪州の農産物を幅広くみる機会に恵まれました。その後、日本に戻ってシカゴの穀物相場とアメリカ農業を中心に穀物需給を見守る仕事を10年近くやっております。

2. 世界の米需給動向とオーストラリアの地位

オーストラリアの米の話に限定すると短時間で終わってしまいますので、まず、世界の米需給を大きくみるなかで豪州はどのように位置づけられるか、この点から始めます。これは、米はどのようなものかと聞かれたときに私がよく使うことですが、4つにまとめられます。まず、アジアのモンスーン地帯に生産と消費が集中していて、人口大国の中国とインドで世界の半分以上を占めていることが第一点です。

次に需給が安定していることが第二点です。米は灌漑ができているところでは生産されますので、非常に安定した作物と考えられます。そのなかで、最近、需給が逼迫している

のは、中東やアフリカで人口が増加し、都市化が進んだのに応じて、そこに居住する人たちのための食糧援助が必要になったという事情があります。

エンゲル係数の高い国々は、食糧価格が乱高下すると政情不安になるということで、政府が市場介入しがちです。それに伴って国際市場が混乱しやすいという特質を有することになります。

ごく最近の例をとりますと、2009年に収穫して2010年に流通する米の流通年度で見ますと、エルニーニョの影響によりインドで米の大減産を起りました。しかし、インドの生産がもとに戻りますと、世界の米需給動向はさほどの逼迫には向かわず、比較的安定した需給の推移が見込まれています。

1図は、世界の米産地を示したものです。北回帰線の南側、南回線の北側の亜熱帯ないしは温帯のモンスーン地帯の水の豊富なところに米産地は集中している。そこから一つだけ離れて、オーストラリアに産地があるのは、非常に特異な現象といわざるをえません。

1表は、世界の米の生産高の推移です。アメリカ農務省の統計によりますが、一昨年、昨年、今年の確定した3年間のベースで見ますと、インドの生産量の変動が比較的大きい。しかし、それ以外の主産地の生産量はほとんど安定している。結果的に、インドの収穫面積が平常に戻れば、世界の米生産にはそれほど大きな変動はない。これは粳米ベースのものですが、単収もそれほど大きくは変動していない。要するに、インドの減産は水不足によって作付けできなかったことによる減産であることが分かる。貿易量、期末在庫も2図に示されるように、2011年現在、世界の米需給動向に関してはさほど心配するような条件はないと考えられます。

アメリカ農務省の統計にもとづいて1960年代以降のやや長期の米の国際需給をみますと、世界の米生産は需要に追いつかたちで推移し、世界の米需給は比較的安定しています。このなかで何処の国が在庫を保有していたかと言うと、90年代から21世紀初頭のWTO加盟の時期にかけては、中国が膨大な量の米在庫を保有していたようです。そのことが世界の米の期末在庫を決定する最大の要因でした。

次は、米の貿易量の推移ですが、3図にみるように世界の輸出国としてはインド、パキスタン、タイ、ベトナム、アメリカ、などの諸国です。オーストラリアも数十万トン単位での輸出国でしたが、恒常的な米輸出国はこういう国々から構成されてきました。

一方で、主要な米輸入国を厳密に特定することは難しい。世界では、非常に沢山の国々が米を輸入していますが、恒常的な買付け地域は中近東のイスラム圏、アフリカ圏であり、

アジアの中では年ごとの変動がありますが、フィリピン、インドネシアが主要輸出国です。中南米も輸入地域ですが、安定的な輸入国はブラジルであり、残りの国は多様でその構成はよく分かりません。米の輸入地域、国としては、後進国といえますか、低開発国、食糧援助に依存するアフリカの国々が圧倒的に多い構図となっています。

世界の米生産を作付面積と単収に分けてみますと、「緑の革命」の影響で単収の上昇が目立っている。作付面積は比較的安定的に確保されているので、世界全体の米生産高は主として単収増によって増大してきたことになります。

4図は米の単収の推移を主要国別に示したものです。籾米ベースによる統計ですが、世界の平均値は図に示される通りですが、インドやタイは世界の単収平均値より低くなっている。世界の平均単収をはるかに上回る国がありますが、それがこれから話題にするオーストラリアです。実に高い単収を実現している。統計でみると、アメリカの単収をオーストラリアの単収が上回っている。日本の単収は1993年に大幅に下落しますが、これは冷夏による凶作で、いわゆる平成5年の大凶作です。オーストラリアも、2005年から6年にかけて、-2004年も霜害がありましたが-冷害が発生した。そうしますと、世界全体でみた米の単収下落は冷夏に起因するものが中心で、干ばつとか降雨量が少なくて米生産が減少するとよくマスメディアで騒がれますが、それよりも冷夏の影響が最も大きいと考えられます。それは、米はかんがい施設のあるところで栽培される割合が高いわけですから、米は水さえあれば作付けできる作物という強味によるものと考えられます。

5図は、シカゴの穀物相場で扱っている、ラフライスと称するもみ米の価格帯です。2008年以降、相場水準が大きく変化し、そうした相場によって取引が行われています。

3 オーストラリアの米産地

こういう状況の中で、オーストラリアの米生産を話題にするのですが、まず豪州の農業地域をみていきます。

6図に示されるように、小麦産地は海岸線から100キロぐらいの内陸部に立地します。私が駐在したのはシドニーですが、シドニーから内陸へ100キロぐらい入ったところに分水嶺があります。東から次第に標高が高まり、海拔300メートル、400メートルぐらいのところまで上昇し、そこから先は西に向かって、ずっとなだらかな坂になっています。海岸線から100キロぐらいのところは雨もよく降るのですが、そこでは農業は営まれていません。西の斜面にかけて、年間降雨量が600ミリ~1,000ミリの平均800ミリほどのところが

小麦産地で、東方、南方にかけての地域です。これをクレセントあるいは三日月型の小麦地帯と言っていますが、それと西豪州の一部が小麦産地です。西豪州も同じような地形です。海岸線から 100キロぐらいまでは農業は行われませんが、そこから二、三百キロの範囲で農業が行われている。そこを越えた内陸部の年間降雨量が 400ミリ以下となり、穀物は生産できず、これらの広大な地域は放牧地に使われている。これがオーストラリアの農業の特徴です。

それでは米はどこで生産するかというと、この図に示される、地名ではリベリナ地域というニュー・サウス・ウェールズ州の南西部に位置します。この地域は、オーストラリアで最大のマレー河がありますが、その一大水系に沿った地域です。マレー河の本流の源流はオーストラリアで一番高い 2,000メートル近い山にあり、キャンベラの南側に分水嶺があって、そこに源を発する川がマレー河となっている。その支流にマランビッジ川という川があり、これに挟まったところにかんがい水路が発達し、そこで灌漑農業が行われ、米づくりもされている。もう 1 つは、マレー河のダーリング川という支流がありますが、その付近で農業が行われている。西あるいは中央部へ行くほど降雨量が低くなります。例えば、6図で示される地域は非常に優れた穀物産地で、ここでは小麦でも 3 トン、4 トンの単収があり、この地域の農民は 500ヘクタール、600ヘクタールで生計が成り立ちます。ところが、西方あるいは中央部に進んだ地域になると、単収が 1 トンちょっとにすぎませんから、適産地の 4 倍も 5 倍もの広い面積の農地でないと生計できません。

このようなマレー河に沿った灌漑地域以外に、もう 1 つの支流のマランビッジ川に沿った地域で灌漑が可能であり、米が集中的に栽培されている。ここにリートンという小さな町があり、米の生産者団体の本部がここに所在しています (7図、8図)。

私が駐在員をしていたとき、麦類の集荷施設の買収の話がありまして、オーバリーという町にサイロを見に行きましたが、その折にリートンの生産者団体の本部に行って、米の圃場などを見る機会がありました。ちょうど収穫の時期でしたが、非常に大型のコンバインで収穫作業が行われていた。

4 オーストラリアの農民像

もう少しオーストラリア農業について補足しますと、それを代表するのは何といっても羊毛です。羊毛生産がピークになるのは 90 年ですが、この時点での羊毛用のメリノ種の羊の数は 2 億 3,000 万匹ほどです。この数字は、羊毛を刈り取った数量からのものです。オ

オーストラリアの農民は、「生産者」と呼ばれないと満足しません。「ウイ・アー・グロワーズ」という言い方をしますが、グロワーズとは育てる人、生産農家ということになります。そういうプライドをもった人たちに「おまえ、何匹飼っているのか」と質問すると「わからない」という返事が返ってきます。なぜわからないかというと、羊は10年近く生きるわけで、それを畑に放っていますから、自然発生的に小羊ができてくるわけで、一々数えられない。年に1回刈り取りますから、刈った羊毛の重さで、おれは8,000頭ぐらいの羊をもっている、ということになる。これで飼育する羊の頭数がわかるわけです。日米牛肉交渉でIDタグを牛につけるのも似たような話です。正確な頭数はよくわからず、一々数えていられないというのが実態ではないかと思います。

重厚長大の時代から軽薄短小というのですか、重い天然繊維から今のユニクロのようなジャケットというか、コートみたいな軽い化学製品に繊維類の素材が変わってきますと、もちろん羊毛価格は下がるわけです。羊毛価格が急落すると、羊の頭数は激減し、今では8,000万頭ぐらいにまで減少している(9図)。

農牧地は輪作として使用していますが、放牧用に使用していた土地が余ると、小麦と大麦の作付面積をふやすことになる。あと、ニュー・サウス・ウェールズやビクトリア州では菜種を栽培するとか、クイーンズランド州ではソルダムとかほかの作物が作付けられる。羊毛産業の縮小と合わせて、麦類を中心に穀物の作付面積が拡大することになる。オーストラリアの農業は、羊毛産業が下降線をたどるにつれて、穀物生産の余地が拡大する構造となっている。90年から最近までの約20年間の動きは、そういう動きになっていると思われる。

5 米生産に影響を与える諸条件

そういう中で米の作付面積は、はたして拡大したかどうか問題です。10図に示される10万ヘクタールのラインを基準にすると、80年代に米の作付面積として10万ヘクタールの基準が達成されて、90年代の中ごろにはそれがもう一段の水準に上昇し、10万ヘクタール後半の水準にまで拡大した時期があった。ところが、21世紀に入ると驚くほどの減少となっている。これは何が原因だろうかということになる。小麦や大麦の作付面積が拡大していますから、輪作で使っていた羊毛用の羊の放牧面積が減少すると、米の作付面積も若干拡大するのではないかと普通には考えられる。ところが、実際にはそうではなかった。その原因は何処に求められるか、ということです。

気象条件との関係を調べますと、単収の動きは11図に示される通りです。巷間いわれるエルニーニョ、ラニーニャとの関係は、それほど明確ではない。ラニーニャと減産との関連では、単収の低下の点では何となく相関性があるようにも思われますが、必ずしも高い相関度とはいえない。

小麦との比較ででは、小麦の減産は非常にはっきりしている。92年～93年、94年～95年、2002年～2003年、2006年～2007年は完全に干ばつの年ですが、それと小麦の単収の下落は非常に明確に一致している。

大麦についても、92年～93年、94年～95年、2002年～2003年、2006年～2007年の降雨量と単収の関係は明確である。

これに対し、米の生産はどのように動いているかという、オーストラリアの米生産が21世紀に入って大幅に減少しているのは、気象条件が影響していることも間違いのないとしても、それだけに起因するものではないと考えられる。

話が少し外れますが、豪州の米は中粒種が主体であり、イタリアのリゾット用の短粒種のアルボリオという特殊米は契約栽培で生産されている。アジアの人が好む芳米もありますが、中粒種が圧倒的な比重を占めるのが特徴です。

オーストラリアの米生産を押し上げた一つの要因は、94年に日本が二百数十万トンの米輸入を行った時にオーストラリアからも18万トンの米が日本向けに輸出されたことです。その後も、日本のMA輸入の10万トン近くのシェアを長期に確保し、オーストラリアに供給余力がある限り、オーストラリアが日本に輸出できたという事情があります。オーストラリアの米にとって、日本のマーケットはすごく大きなインセンティブでした。ウルグアイ・ラウンドの合意によって、ある時期から70数万トンの米を日本はMA輸入するようになったが、半年ずれた中粒種の供給産地であることが評価されて、オーストラリアは一定のシェアを確保してきたわけです。しかし、水資源の制約で供給余力が一時的に失われて日本に輸出できない事態が生じた。そのことが、米輸出国としてのオーストラリアの地位、および米生産に大きく影響しています。

逆にオーストラリアは最近の2、3年、中粒種をアメリカから、長粒種や産業用の特殊な米はタイから輸入する輸入国に転じてしまった。そうすると、当然に輸出市場から撤退することになり、オーストラリアは特殊な米の生産国であることが分かるようになった、次第です。

要約すると、灌漑の可能性からして米生産の地域がごく限られていることが最大の特徴

です。ニュー・サウス・ウェールズ南西部のリベリナにも灌漑施設があり、その灌漑によって輪作体系に組み込まれて米生産が行われている。しかし、灌漑用水が入手できなくなると直ちに生産は中断されてしまう。

オーストラリアで米生産を立ち上げる時に、愛媛出身の高須賀さんという方が非常に苦労されたが、結局、うまくいかなかった。ニュー・サウス・ウェールズ州の農業試験場が、当地の気候がアメリカのカリフォルニア州と似通っているので、カリフォルニア米ならうまくいくかもしれないということで、カリフォルニア州から、カルローズの先祖になる中粒種の種を持ち込み、それを栽培したら成功したとの歴史があります。この意味で、カリフォルニア州の米づくりと非常に類似しているところがある。

もう1つの特徴は、乾燥地の畑作輪作体系に組み入れられた特殊な米生産の方法である。水の供給が確保されれば、世界最高の単収が実現する。その意味でも、オーストラリアの米事情には大きな特殊性があると思われます。

6 豪州農業の特徴

少し、話の順序が逆になりますが、豪州の農業の特徴について取り上げます。まず、オーストラリアの面積は広大で、日本の国土面積の20倍にも達する。このうち、穀物生産に使用されるのは2,200万ヘクタール強の国土の3%を占めるにすぎない。沿岸部にかろうじてかかるような形状にオーストラリア農業が立地している。

最近、マスメディアで、クイーンズランドのブリスベンが大洪水になったニュースをごらんになったと思います。このブリスベンには海岸線から100キロ奥地のなだらかな高地に位置し、300～500メートルほどの標高の土地です。そこは赤土の大地となっている。そこが一たん水をいっぱい吸収すると、それ以上は吸収できない。そうすると、水が一挙に下方に押し流される。

この辺の赤土の下には世界で一番良質の石炭が埋まっています。これは、新日鐵などが高炉用に使用する石炭で、もちろん中国もその石炭を使用している。ここが洪水になると石炭を積み出せない。鉄鋼は鉄鉱石と高品質の石炭で生産されますから、石炭が手に入らないと大変なことになる。今、世界の鉄鋼用の良質な石炭の20%ほどはこの地域から産出されますが、この辺一帯の洪水騒ぎで海運市場や国際市場は、小麦が積めないことよりも石炭が積めないことに関心が集まっているわけです。そこから西側に穀物産地が立地している。

こういう川は、ミシシッピ川やラプラタ川のようなイメージの川ではない。雨が降っているときだけ流れる川です。ふだんはほとんど水が流れていないが、集中豪雨的な雨が降ると一気に水が流れる川です。その上流にダムがあり、そこから水の割り当てを受けて灌漑用の水が供給されている。

先ほど話したように、オーストラリアの農業は一時期までは羊毛で成り立つほどに羊の比重が非常に高かったものが、90年以降は羊毛離れで農業の構成が大きく変化したことが一つのポイントです。

オーストラリアの入植は、アメリカの独立と対にして理解する必要がある。アメリカの独立戦争は1776年に始まりましたが、1770年にキャプテン・クックがオーストラリアを発見している。フリートがオーストラリアに入ったのが1788年で、1797年に最初に羊が運び込まれたと言われています。オーストラリアで最初に米栽培が試みられたのも、その頃とされます。日本人の高須賀さんが1900年代初頭にオーストラリアに渡って、最初は貿易業務をしようとしたのですが、米づくりを始められた。日本から持ち込んだ種で一生懸命に米の生産を試みたが成功しなかった。年間降雨量は 400とか 500ミリの土地柄ですから、ほうっておいたら農業はできません。このため、灌漑の施設をつくって、農家の定住計画を立てて400戸ほどをこの地に入植させたといわれています。そこにカリフォルニア米の種を持ち込んだら、米生産に成功したという経緯です。

7 オーストラリアの米生産の仕組み、特徴

オーストラリアの米生産は、まず土地を均平にしたうえで、何ヘクタールにおよぶ大きなプールをつくる。土手を周囲にしたプールをつくることをイメージしてください。そこに水を引き込む。水を引き込む前に、地面を引き搔いて筋をつける。その上に水を張って、発芽直前にした種を飛行機で空中散布すると水の上に落ちた種は切った溝のところにうまく落ちていく。水を抜くと、それがうまく発芽して生育していく。そのような方法で圃場を作り、種子を空中散布する。水の汲み入れ口のところに容量1ガロンほどのバケツの大きなものを幾つか装備した水車がぐるぐる回っており、それによって用水路から圃場への給水が行われる。水車のところにカウンターというのですか、計算機がついていて水車がぐるぐる回ると、用水路からプールになっている畑に水を何ガロンくみ出したかが分かる仕組みです。その計算機によって、個々の稲作経営者の給水量が計測され、料金が課せられる。

写真を見ると理解しやすいのですが、収穫機械は、実は米・小麦・大麦兼用のコンバインです。ヘッダーは一緒に、バリカンのお化けみたいなものが前に装着していて、ドラム型の大きなワイヤーで茎を刈っていく。バリカンが一番下のところにつけて、それで刈り込んだものを巻き込む方式で、収穫作業の方法は米も小麦・大麦も一緒なことが特徴で、田植え用の機械は不要ですし、収穫用機械も稲作のためにとくに必要としない。もちろん、一部のアタッチメントは若干の調節の必要がありますが、コンバインや附属の機械は小麦などと全く一緒のもので足りるわけです。あとは、水の手当てをいかにして圃場をどのように管理するかが、米生産の非常に大きなポイントになる。このよう農法ですから、米も小麦も同様に作付できるわけです。

このなかで、米の作付面積がどうして一挙に減少したかが一つのポイントです。90年代後半には10万ヘクタール台の後半の規模に達しましたが、これには日本の米の市場開放というか、ミニマムアクセス輸入が大きく寄与していたわけです。しかし、それ以降には気象条件に左右されて、米生産のための給水の割り当てが確保できなくなる。灌漑用水の確保ができなくなると、米の作付面積の確保も困難になる。用水の確保と米作付面積の確保とは一体の関係となっている。ここに、オーストラリアの米づくり、米生産に関わる致命的な問題が存在している。

農地面積自体は広大に存在するわけですから、小麦、大麦は作付けできる。あとは雨が降ってくれるかどうかにかかっています。年に3回も雨が降ればいいといわれており、そのように降りさえすれば単収水準は高く、相当の収穫量となる。しかし、雨が降らなかったら、収穫量が半減するというのがオーストラリア農業です。その意味では、穀作は一種のギャンブラー的な要素を有している。ですから農家はだれの保護も受けていない。オーストラリアの農家は、私どもは政府の保護を受けていませんよ、全部ギャンブルとしてやっています、というようなことを言うわけです。

8 オーストラリアの歴史および連邦、州政府の関係

オーストラリアの特徴は、農業への政策的な保護はないことです。生産者に対して政府がフォローすることはない。そもそも、連邦政府はそのような統治形態になっていない。このことは、オーストラリアの開拓の歴史に遡ることであり、地域、州ごとに勝手に入植活動が始まったことに起源がある。囚人を連れていって入植を始めた、ニュー・サウス・ウェールズを中心とした東側、ゴールドラッシュで一気に人口が急増したビクトリア、そ

れ以降、オーストラリアはいいところだと分かるに従って入植が盛んになったのが、アデレードを中心とするサウスオーストラリアであり、西豪州に相当する。こういう入植の経緯ですから、様々な問題が生じる。一例を挙げると、開発母体が全然違うので、州によって鉄道のレール幅が相違することになる。クイーンズランドは狭軌、ニュー・サウス・ウェールズはスタンダード、ゴールドラッシュによる潤いで建設されたビクトリア州は広軌、西豪州は狭軌と、州によってばらばらです。開発主体になった人たちが自分の都合のいい仕組みを持ち込みますから、鉄道の幅までが相違するままで開発されてきた。これがオーストラリアの一つのおもしろいところです。

この結果、それぞれの州、地域に入植した農民の出自も相違しますから、言葉も違う。東豪州側はMATE（マイト）という言い方をする。それはメート、お友達という意味ですが、南や西へ行きますとそれがPAL（パル）になる。ペンパル、お友達ということで、PALと表現します。全く違うそれぞれのグループによって豪州が開発された所産です。

オーストラリアのもう1つの特徴は、政府の全く保護なしに農業生産や農産物流通が始まったわけですが、生産者に対する唯一の保護というか、特典は、販売権を与えたことです。それは一種の保護の形態かもしれませんが、特に輸出販売の独占権はシングル・デスクと言われ、イギリス連邦の加盟国で共通にみられる仕組みです。カナダもシングル・デスクで有名ですが、それがオーストラリアでも一般化していた。1970年代まではすべての商品がそういう形で、州ベースでシングル・デスクのスタイルで運営されていた。したがって、乳製品や小麦などもその販売方法が一般化していますし、米の場合にもニュー・サウス・ウェールズ州法による第一次産品の出荷・販売法によって、そういう独占販売権が米の生産者に与えられた。こういう仕組みで、米の出荷、販売が運営されてきたことが一つの大きな特徴です。

もう1つのポイントは、国内の生産と流通は州政府の権限であることです。連邦政府が成立した時には、国際的な通商交渉、関税、動植物の検疫、通信、軍事は連邦政府の所管であるとし、連邦と州政府の役割分担が決まりました。ただし、豪州の人口は少ないので、生産したものの3分の2程度、すなわち6～7割は輸出されますから、商品によっては貿易自由化の推進が連邦政府の大きな仕事になります。例のウルグアイ・ラウンドのガット交渉時に、ケアンズ・グループとして有名になった自由な農産物貿易を推進するグループのリーダーとなって、国際通商会議などの場でオーストラリアは関税や保護貿易への反対派の代表として登場してきた。このような特徴はすべてオーストラリアの開発の歴史に由

来するものですが、そこにオーストラリアの特色があります。

9 オーストラリアの社会の特質－階級・身分制社会－

オーストラリアは、資・農・鉱・商と表現するのですが、身分制というか、意外に階級区分が堅固な社会でもあります。「えーっ」と思うぐらい階層分けされている。皆さん、ラグビー・フットボール、日本でいうラグビーをご存じだと思いますが、あれは弁護士や大学の先生など、非常にハイソサエティーのスポーツです。なぜかという、ディシプリンといいますか、ルールに忠実にやらないといけないうスポーツであり、そのことがハイソサエティーのスポーツだとされるゆえんです。東豪州は、リーグというスタイルの野球的要素を取り入れたラグビーが盛んです。それを庶民が一番楽しむ。その下にOGラグビーがあって、これは何でもありの競技です。クリケットのスタジアムを使って、ラグビーボールよりも一回りも小さなボールで、飛んだりはねたり、半分プロレスまがいのラグビーです。もっと下の労働者階級というか、一番下の階層の人々にえらい人気がある。だから、お前、何が好きだと聞かれて、おれはOGラグビーが好きだというと、我々のグループ、階層ではないということになる。トランスネーションズの、ラグビーの12チームで構成されるビッグリーグがあります。オーストラリアが6つ、ニュージーランドが3つ、南アフリカが3つの12チームでつくって、ラグビーリーグをやっている。それが日本でいうラグビーです。それを追いかけていると言うと「おーっ」となり、庶民とは違うグループだと言うことになる。クリケットが好きだというと、これはとんでもない暇人になるわけです。だから、資・農・鉱・商ではないのですが、国民のなかでも相当に階層差が存在する。このなかで、オーストラリア経済を動かしている資本家は、本国のイギリスに居住している。また、オランダやアメリカの巨大な金融機関も資本家階層に属し、番頭さんというか、管理人をオーストラリアで雇って経営を運営させている。それは鉱山会社でも、生命保険や金融機関でも同様に該当し、そういう会社は番頭さん、お代官さんが経営している。オーストラリアで生まれて、オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズ大学などの大学を出た人は部長さんクラスまでは行く。しかし、日本でいう執行役員どまりです。役員会のメンバーにはなれない。こういう身分制がオーストラリアには存在し、「えーっ」と思うときがあります。

10 豪州時代の営業活動の思い出

面白いのは、農業が社会的に偉いというか強い立場にあることです。農家は農家とは言わずに、グロワーズという。それが偉いことを意味する。巨大な土地を所有し、羊を1万頭ぐらい飼っている。牛は何頭も飼っていることが偉い、強いことになる。それは田舎政治家であり、何でもありということで、えらい力をもっている生産者が多い。彼らにいわせたら、「おまえら、売ってこい」という格好になる。私ども伊藤忠商事はニュー・サウス・ウェールズ州に基盤を置き、オーストラリアの羊毛のナンバーワンの輸出業者を30数年間やってきて、毎年、オーストラリア州政府から表彰状をもらった会社です。それが、お百姓さんにとっては、「ああ、羊毛の売り子さんか」という位置づけになる。だから、我々がほかの農産物の大麦をやりたい、何をやりたいというと、「ああ、そうか。おまえのところの会社は、羊毛で汗を流してくれた会社だな」ということで評価してくれる。「おまえ、羊毛でそれだけ売れるのだったら、これも売れるだろう。売ってこい」ということになる。「そのために必要であれば、おまえのところを代理店として起用してやるよ」ということで、私の時代は、ニュー・サウス・ウェールズ州の大麦の代理権をもらって大麦を販売しておりました。

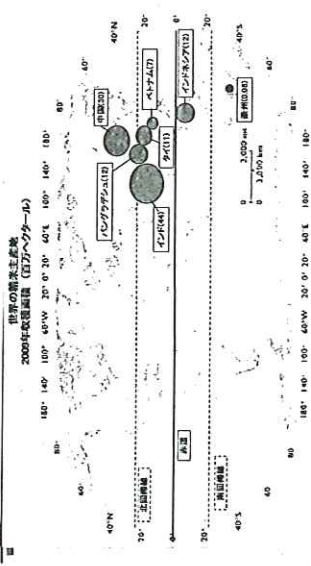
アメリカドルが強い時代でしたので、FOBは国際市場で100ドルを割るような値段で大麦を取引していた。売ってこいというので、「売るのは簡単で、売るよ。でも、USドルで100ドルですが、いいのですね」と言うと、「いいのだ。売ってこい」というわけです。その当時の豪州ドルは、今では信じられないのですが、対USドルでは60セントで為替取引されていた。為替レートが、アメリカドルに対してオーストラリアドルは6掛けの時代だったわけです。ということは、豪州ドルで百何十ドルもらえるわけです。170ドルぐらいの豪州ドルの実入りになる。「それは何年に1回しか手に入らないのだから、おまえ、絶対売ってこい」というわけです。国際市場ではアメリカドルで取引されている以上、ローカルカレンシーで取引する、例えばオーストラリアの農家にとっては、私が営業していたシドニーオリンピックの時代は非常にいい時代だったわけです。今はアメリカドルがすごく弱くなって、オーストラリアドルとアメリカドルは対等な価値で取引され、ほぼ1対1です。1豪州ドルは1USドルに相当する。こういう時代になりますと、国際市場の200ドルはオーストラリアドルの200ドルになる。私の時代は、国際市場価格が100ドルのときは、豪州ドルは170、180の時代ですから、「いいの？」といっても、「いや、いいよ、いいよ」ということになる。今となれば、穀物生産者は「うーん」となると思うのですね。

ローカルカレンシーの立場からすると、国際市場のドル建て価格は、アメリカドル以外の通貨で生活している人たちの輸出国にとって非常にはた迷惑な話になると感じています。こういうところはちょっと理解されにくい部分だと思いますが、それがトレードのリアリティーの部分だと思います。

パプアニューギニアのすぐ先にラバウルがあることは、年配の方はご存じだと思いますが、国連の信託統治になっている。オーストラリアがパプアニューギニアを一時預かっていて、その時にはパプアニューギニア向けの米は、オーストラリアのライス growers が一手に独占していたわけです。その近辺に、アメリカが信託統治を受けていたパラオとかいろいろな国々があります。ああいう南洋諸島向けの米も、オーストラリアの米生産者グループが独占し、「君たちは米なんかつくれないから、私達に任せておきなさい」と言っていた。でも、日本の農業技術者が行って、米生産の方法を教えると簡単に米は栽培できるわけです。モンスーン気候ですから、ちょっと工夫すれば米を生産できる。でも、我々商社にも問題がありますが、オーストラリアからの米輸出に加えて、ODAがらみの援助が南洋諸島の農業発展を阻害する面があります。一例を挙げますと、ODAの資金を使って何千トンも精米できる精米機を、米生産を始めた島の村落にどんと据える。30トン、50トンしか米を生産しない村に、何千トンも精米できる精米機を設置する。この結果、収穫後の2日か3日したら、精米業務は終わりにになってしまう。あと1年間、熱帯雨林に近いようなところで放って置かれるから、すぐさびついてしまう。そんなことをしたら、どんないい機械を設置しても、2年、3年もすればさびついて全部が無駄になってしまう。

そのようなことはいけないのですが、向こうの政治家が悪いことも原因している。大きな施設を設置しないと自分が働いたことにならないとの考えです。そうすると現地で精米できませんから、定着し始めた米生産も持続せず、また、オーストラリアからの米輸出に依存することになる。そういうことをしてはいけないわけで、長く安定的に持続できるやり方で支援しなければ農業生産は定着できない。その場所で自給自足できるような仕組みをつくらないと、人がどうしても都市に流れて、都市で食糧問題が起こる。そのために食料援助が必要となる。こういう悪循環になっていると思います。それは、私がパプアニューギニアのポートモレスビーで3年半ぐらい仕事をしていたときの一つの感想です。豪州の小麦はイラクで死の商人的なスキャンダルを起こしましたが、実は米もそういう格好で南洋諸島の米生産の発展を阻害していたということがあります。

図1 世界の精米主産地



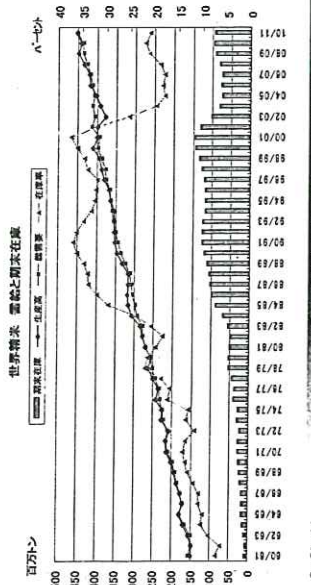
© 2002 National Geographic Society
Confidential
Marketing Research: Official Provision Food Company, TOCHU Corporation

表1 世界の精米生産高推移

世界の精米生産高推移(単位: 百万トン)				
	00/00年度実績	00/10年度推定	10/11年度予測	対比(対比)
中国	134.3	138.9	139.3	+2.7
インド	99.2	89.1	95.0	+5.9
ベトナム	24.4	24.7	24.8	+0.1
タイ	28.5	28.5	28.5	0.0
インドネシア	30.3	31.0	32.0	+1.0
フィリピン	31.0	31.0	32.3	+1.3
ミャンマー	0.1	0.1	0.5	+0.5
ベトナム	44.1	44.2	45.4	+1.2
参考:				
世界の収穫面積(百万ヘクタール)	157.8	155.1	155.8	+4.5
単収(トン/ヘクタール)	4.25	4.25	4.20	+0.01
単産量(百万トン)	20.0	30.1	30.9	+0.8
対米生産(百万トン)	91.1	94.3	94.8	+0.3

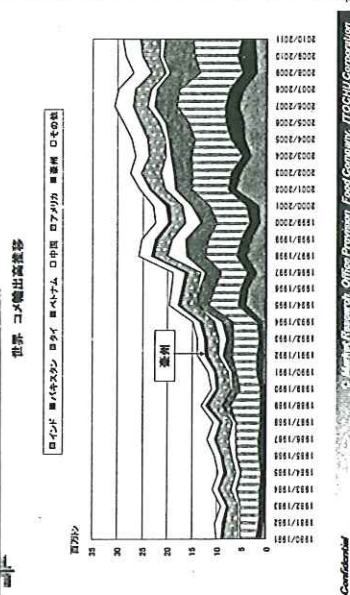
出典: USDA, Grain: World Markets and Trade
Confidential
Marketing Research: Official Provision Food Company, TOCHU Corporation

図2 世界のコメ需給



Confidential
Marketing Research: Official Provision Food Company, TOCHU Corporation

図3 世界 コメの貿易量推移(主な輸出国)



Confidential
Marketing Research: Official Provision Food Company, TOCHU Corporation

図5 シカゴ、ワシントン、ミシシッピ川

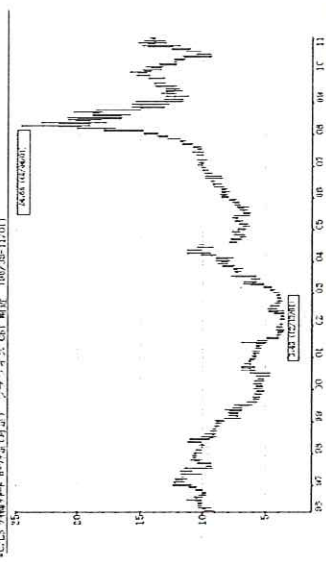


図7 マレ一河水系

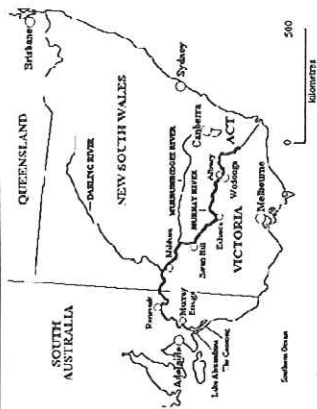


図8 豪州コメ産地と施設



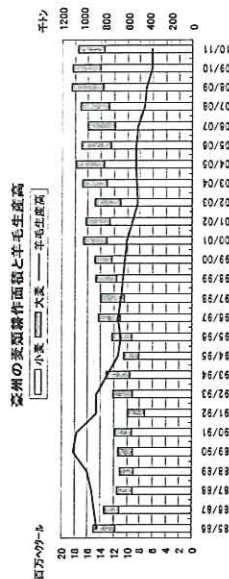
出所: Ricegrowers' Association of Australia

Copyright © 1999, ITOCHU Corporation

Confidential

9

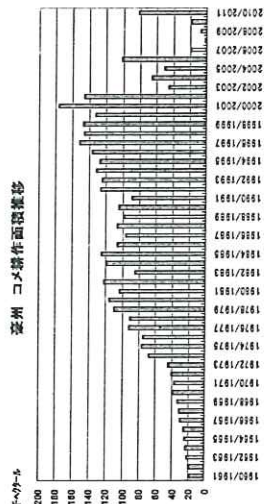
図9 豪州の麦類耕作面積と羊毛生産高



Confidential

9

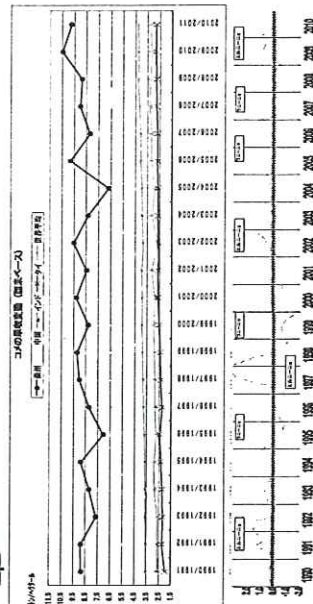
図10 豪州 コメの耕作面積推移



Confidential

10

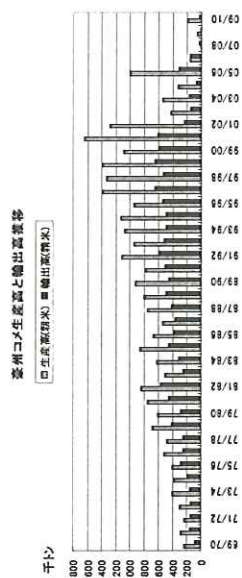
図11 天候とコメの単収変動



Confidential

11

図12 豪州コメ生産高と輸出高推移



Confidential
Copyright © 2001 Nippon Rice Research. Official Premium Food Company, TOCHU Corporation